

「天高ルネサンス」の思い出

高46期 戸村 智 憲

たった3パーセントです。私達が天王寺で学べたのは、100年の内の、たった3年です。しかし、あっという間に過ぎた3年間は、学び得たこと数多く、充実した有意義な期間でした。その3年が積み重なり、今、記念すべき100周年を迎えます。天王寺の歴史の重さを、改めて感じさせられずにはられません。私も、天王寺の一員として末席に加えて頂き、共に祝杯を挙げられることは、この上ない光栄です。

さて、私の属した「3%」はと言いますと、100周年を前にした変革の時期でした。旧校舎には桜で迎えられ、新校舎には螢の光の歌い初めができた、大変幸運な時期です。当然ながら、新校舎の建設を目にしました。時には外壁塗料の粒子が風に運ばれ、メガネレンズに、ぶつぶつがこびりつきつつも、工事の様子を、窓からそっと眺めた記憶があります。ガンガン、コキーン、ドーン——初めは不快でしかなかった工事の地響き。それも、日を増すにつれて、新生天王寺の胎動と感じられるようになったのは、全く不思議なことでした。

やがて、新校舎は完成しました。廊下のミシミシときしむ音はなくなり、広くて開放的な雰囲気は、旧校舎とは対照的で新鮮でした。新品特有のむせぶような匂いに包まれ、「エレベータがつくらしい」「茶道室もあるぞ」などと、新入生気分でガヤガヤしている自分に、ふと気がつくのでした。「新品讃歌」と共に、「連結イス鎮魂歌」の合唱を熱願していたものの、残念ながらありませんでした。姿勢の自由を拘束するという点で、天王寺らしくない、悪評高き連結イスは、依然として健在です。

新校舎に移ることは、同時に旧校舎との別れを意味します。生徒数減少による校舎設計の都合で、当時3年生12学級の内、3学級の臨時教室となった、生物講義室の向こう側で、旧校舎の解体が行われました。建設にかかる時間と比べて、解体はほんの一瞬です。大きな黒い鉄球が、ゴン、と一発ぶつけられる度に、ガラガラと崩れ落ちてしまいます。その作業の模様を通じて、旧校舎が身をもって教えてくれたことは、伝統を継承する必要性だったと思います。「もしも継承を怠り、旧校舎に伝統を置き忘れていたら、ほんの一瞬で崩れ去る伝統を前に、ただ指をくわえて見るしかなくなってしまう。」そんなメッセージを残して、最期まで、学び舎としての役割を果たし、今や形を超えた存在となりました。旧校舎は、グラウンドの土に帰り、まさしく天王寺の礎として、生徒の足跡を重ね、日々深みを増しながら息づいています。

そこで、私なりに天王寺の伝統を考えると、『秘伝のタレ』のようなものだと思います。代々伝わる年季の入ったタレに、新たな要素をつぎ足してコトコト煮込むと、一味違った、独特のコツメリとした濃い味が出てくる。でも、それでいてよくなじみ、高い潜在能力を持った生徒にからめると、素材本来の味わいを損なうことなく、グッとウマミを引き

出せる。そんな絶妙な塩梅のタレだと思います。だからこそ、一度味わうと生涯忘れられず、是非とも、次の世代にもこの味を伝えてやりたいと思うのでしょう。後味も良く、卒業後も天王寺を愛し続けるのです。

ところで、その魅力的な伝統の一つに、自己実現としての自治会活動があります。全国的風潮でしょうが、天王寺も、自治会への関心が低い時期がありました。ちょうど、『天高ルネサンス』が叫ばれ、天王寺の再生が求められた時期でした。事態を憂慮した有志が奔走する中、私は文化委員長として、文化面の改革に加えて頂きました。一言で改革と言っても、そう簡単にはいきません。沈滞ムードが蔓延し、誰も現状に不満を抱きながら、どうせ変わりっこないとあきらめ、情熱も冷めがちでした。そこで、処方箋として改革案が出され、かねてからの問題に一石が投げられると、論争の火が燃え広がりました。多い時には、1日に三つの会議があり、7時近くまでかかったこともありました。真剣な議論の中で、多くの人々は、今、自分の意見が学校を変えつつあるんだ、という確かな手ごたえを感じとれたようです。改革の進展が目に見えてくると、より一層熱がこもっていきます。そうやって2年半ほどして、改革が実りました。

私はこの改革の体験から、自治会の素晴らしさに、強く感銘を受けました。先輩・後輩にかかわらず、多様な考えを持った人々が、よりよいものを目指して意見を主張し合い、最終的には、いろんな要素がギュッと凝縮された、一つの結論をまとめ上げるのです。もちろん、これは、初めから選択肢が与えられているのでもなければ、それ自体が問題として課せられているのでもありません。全ては、何が問題なのかを、自分自身の手でつきとめることから始まります。様々な意見を持ち寄って対策を練り、責任を持って実行に移すのです。この課程では、しばしば対立も起こります。一般的には、暗いイメージを抱きがちですが、天王寺での対立は、「つぼマッサージ」のように健康的です。本音でズバッと核心を突かれるので、痛いながらも気持ちいい、アンビバレントな感覚で、後にしこりを残さず、スッキリとするのです。意見の凹凸も、お互いの理解が進むにつれて、まるでジグソーパズルのようにピシッとはまり、『改革』という1枚の絵を仕上げたのです。この時の喜びは、教科書をはるかに超えた、今を生きているんだ、という人間としての喜びそのものです。自治会活動を通して、手を取り合い、盛り上げていった仲間と共に、新旧変革のささやかな担い手として、歴史の感動的瞬間を共有できたことは、何より素敵な思い出となりました。

幸運にも、天王寺に学びの露を受け、限られた時間の中で、計り知れない程の貴重な経験をさせてもらったことは、これからの人生での大きな励みとなりそうです。今度は天王寺2世紀。ますます栄え行くと思うと、何だかわくわくしてきませんか。天王寺が、挑戦する伝統として、果敢に更なる発展を勝ち得て行かれることを、心からお祈り致します。

桃陰百年

大阪府立天王寺高等学校創立100周年記念誌

平成8年(1996年)11月17日発行

編集・発行

大阪府立天王寺高等学校

創立100周年記念事業委員会 記念誌委員会

〒545 大阪市阿倍野区三明町2-4-23

TEL (06) 629-6801 (代)

印刷

綾田印刷株式会社

〒542 大阪市中央区谷町7-1-53

TEL (06) 762-9212 (代)